
神々の宵

望月満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の宵

【Nコード】

N1671V

【作者名】

望月満

【あらすじ】

宵に舞う蝶を追って、月読命は美しい桜の女神、木花咲耶姫と出会う。彼女の守護する桜の木には人々が願掛けをしており、それらの願いを叶えることなど自分にはできないと木花咲耶姫は悲嘆に暮れていた。そんな彼女の元へ、一人の来訪者が――。日本神話風短編小説。

其ノ壺

宵闇を流れる微風の中を、ひとひらの蝶が優雅に舞う。その鱗粉は白い光の粒子となり、雪のように煌めきながら落下していく。風を孕む薄い羽は鮮やかな薄花桜を放ち、しとやかな冬の青空を彷彿とさせた。

「ほお。まことに美しい。闇の中を舞うとは、稀有な胡蝶だな」

そんな美しい蝶に魅了されてか、一人の男がその羽を追う。

若い男だった。目を引く透き通るような銀髪と、光沢を帯びた同色の瞳。闇の中で発光するように輝くそれは、虚空から静かに地上を照らす月を思わせる。

低空を揺蕩^{たゆ}う蝶を追っていた彼は、視界の隅を泳いだ淡い紅色にふと顔を上げる。薄紅のそれは、小さな花弁であつた。微笑むように柔らかな色をしたそれは、そここの闇を鮮やかに染め上げる。男は花弁を視線で辿り、その先にそそり立っていた明媚な桜の木に感嘆の吐息を漏らす。

「あら、このような時刻に客人とは珍しいわね」

桜の根本に歩みよつた男へ、唐突に若い女の声が落ちてくる。

「……その声は、コノハナサクヤヒメ木花咲耶姫か」

「そうよ。久しいわね、ツクシミ月読命」

満開の桜を見上げる男の前に、桜色の衣を纏つた女性が微かな鈴の音と共に霧のように姿を現す。

漆細工のような艶のある黒髪を持つ、優艶な美女であつた。彼女の桜の花に彩られた頭の上へ、薄花桜の蝶が羽を休める。

「その胡蝶に導かれここまで来たのだが、咲耶姫の使いであつたか」
月読命は白くすらりとした指で蝶を示し、咲耶姫はうつすらと笑みを浮かべる。

「ええ。美しいでしょう？」

彼女の声に促されるように、蝶は闇へと身を躍らせる。二人が見

つめる中、蝶は桜の木の枝に結ばれた鈴に止まり静止する。よく見ると、まちまちの色と形をした数多の鈴が、桜の枝に結ばれていた。

「咲耶姫、これらの鈴は何だ？」

「それは、人間たちが願掛けをしているのよ。私に願いを叶えて貰おうと、鈴を結んでいくの」

咲耶姫の言葉に、鈴を仰いでいた月読命は嘲笑するように喉を震わせる。

「咲耶姫はこの木の守り神であつて、願いを叶えられる訳ではないというのに。全く、人間というのは愚かしい生き物だ」

月読命の笑いに気分を害したのか、咲耶姫は頬を膨らませる。

「笑つてはなりません。願を掛けに来る人間は皆、心の底から私を信じ、信仰しているのよ。それを馬鹿にするそなたの方が、よほど愚かしいわ」

彼女はふいと余所を向き、憂愁な面持ちで言葉を続ける。

「それに、人間が叶わぬ願いを私に語りかける度、自分の無力さに苛まされてしまうの。仮にも女神である私が、人間一人の願いさえまともに叶えられないなんて」

自嘲するように、咲耶姫は片頬をつり上げる。月読命は僅かに頭かぶりを振りながら、瞼を伏せる彼女の横顔を見つめる。

「仕方のないことだ。たとえ神であろうと、万能ではないのだから」
月読命の言葉に、咲耶姫は顔を上げ彼を振り向く。烏の濡れ羽色をした瞳が、真っ直ぐに月読命を見上げた。

「月読命は——」

其ノ貳

咲耶姫が言葉を紡ぎ終えるより早く、二人の近くの茂みがざわめく。神経を張りつめ、音の方向へ二人は同時に視線を投げる。

闇に溶け込んでいる茂みの中から姿を現したのは、一人の童男おぐなであつた。童男はあちこち傷を負っており、胸の前で懷刀をきつく握りしめていた。

「……何と、数日前に鈴を結いに来た者ではないか」

「童が出歩くには、些か遅い時刻だがな」

咲耶姫は緊張を解き、今にも泣き出しそうな顔をした童男を珍しげに見つめる。月読命は気を緩め、神である咲耶姫と月読命の姿は見えぬ彼に対し、首を傾げる。

童男は歪んだ顔で桜の木へ歩みよると、軋むほど強く奥歯を噛みしめた。

「嘘つき……。嘘つき、神様は皆嘘つきだ！ この木に願えば、叶うんじゃないかったのかよ！ 何でだよ、何で母さんの病は治らないんだよつ……。！」

童男は、木に向かつて吠え叫ぶ。彼の両眦りょうまなこからは大粒の涙が溢れ、頬に尾を引いていた。

童男の様子を傍で見ていた木花咲耶姫は、苦し気に顔を逸らす。

「そなたが気に病む必要はない」

月読命は咲耶姫を慰めるように、その黒髪をそつと撫でる。

「分かっている。しかと理解しているつもりなのだが——！」

突如、咲耶姫が胸を押さえ苦しげな呻き声を上げる。彼女は立っていることすらおぼつかず、ついにはその場に崩れ落ちた。

「咲耶姫？」

月読命ははつと息をのみ、彼女を起こそうと膝を折る。

「……止、めて。痛い、苦し……」

掠れた声で訴える咲耶姫は、小枝のように細い腕を桜の木へと伸

ばす。後を追うように視線を桜へ向けた月読命は、焦燥と驚愕に言葉を失った。

「嘘つき！　嘘つき！　母さんを治せよ！」

木の根元では相変わらず童男が叫んでおり、あるうことか抜き放った懐刀を桜の幹に突き立て、無我夢中に切り刻んでいたのだ。

「止める！」

月読命は懸命に叫ぶが、その声は人間である童男には届かない。喘ぐように荒い息をする咲耶姫の額に、脂汗が滲む。震える両手は胸を押さえ、苦しみと悲しみに瞳が濡れる。

「……頼む、よ。俺の、たった一人の、家族なんだ……！」

童男の声から、覇気が抜ける。と同時に、その手から懐刀が落ち、鈍く光る刀身が地に横たわった。

痛みから解放された咲耶姫は、肩を大きく上下させ、目尻を濡らす涙を拭う。

「お願いだ……神様……！」

童男は桜の幹にすがり付き、静かに涙を流す。

「童男……」

咲耶姫を起こし座らせると、月読命は童男へと歩みよる。

「……流行り病のせいなの、その童男の母上が臥せっているのは」

月読命の背後から、咲耶姫が静かに語りかける。呼吸は幾分か安定しており、痛みもないようだった。

「最近、町の方で病が蔓延しているのよ。きっと、そのせいなんだわ」

「治療法や治療薬は、見つかっていないのだろうか？」

月読命の問いに、咲耶姫は首を左右に振る。

「それは分からないわ。けれど、もし治療できたとしても、その童男の家計に余裕などないのでしょ」

其ノ参

俯く咲耶姫を見つめ、月読命は拳を握りしめる。

「人間とは不幸な生き物だな。何が嘘つきだ。この木に願えば叶うと、人間が一方的に思い込んでいるだけではないか」

彼は童男を睨みすえ、やがてため息を吐き出す。

「いつそ伊邪那美^{イザナミ}を呼び、この童男を黄泉へ送ろうか」

「なりません、月読命！」

咲耶姫は鋭く叫び、傾ぐ身体を無理矢理立ち上がらせると、童男の元へ進む。

「……咲耶姫。しかし、それが最善と思わぬか？」

「思わないわ。死はどのような形であれ、悪しきこと。善いわけがないわ」

咲耶姫は木の根元にひざまづき、童男の頭を優しく撫でる。泣き疲れたのか、童男は安らかな寝息をたてていた。

やがてその手を離れたかと思えば、咲耶姫はすくりと立ち上がり遙か頭上を見上げる。

「風神^{ふうじん}よ。そこに居るのだろう？」

咲耶姫は大声で風の神の名を呼ぶ。と、どこからともなく強風が吹き荒れ、大量の桜の花が散る。流れる花弁は、虚空に薄紅の小川を作り上げていた。

風に揺れる鈴の涼やかな音が響き渡る中、

「お呼びかな、姫様」

褐色の肌をした男が、桜の枝に腰を下ろしていた。

着物の胸元をはだけ、青灰色の長髪を結わえている彼は、冷やかな灰色の瞳で咲耶姫と月読命を見下ろす。

「月の神、月読命に桜の女神、木花咲耶姫。美男美女揃って、一体俺になんの用かな？」

唄うように風神は二人の名を呼び、微かに髪を揺らす。

「某は呼んでいないのだがな。咲耶姫、そなた何のつもりだ？」

咲耶姫は月読命の問いには答えず、胸の前で手を組み風神を真摯に見上げる。

「風神、昨今街で流行っている病は、そなたがもたらしたものでしょう？」

「当たり前だ。俺は風とともに病も運ぶ。それがどうした？」

風神は半笑いの顔で言葉を落とす、眉根を寄せる。

咲耶姫は大きく胸を上下させ深く息を吸い、静かに告げる。

「では、そなたならば病を払い去ることも出来るのよね？」

彼女の言葉に、月読命は目を瞪る。

「咲耶姫……！」

自分と呼ぶ彼の声に、咲耶姫は微笑みながら振り向き、少しだけ頷いて見せる。

「それはそうだが、まさか流行り病を払い去れって言うのか？」

「そのまさかよ」

咲耶姫の神妙な声音に、風神は虚を突かれたように驚き、やがてケケケツと寒風のような底冷えする笑い声を上げた。

「これはとんだお笑い草だ。あんたが何のために、そんなことを俺に頼む？」

咲耶姫は俄に顎を引き、押し黙る。風神は意地悪い笑みを浮かべ、悠然と咲耶姫を見下げる。

「……咲耶姫は、そこにいる童男の母上を助けたいのだ。彼の母上は、流行り病で床に臥せっているらしい」

其ノ肆

月読命の口から、諦めたような呆れたような響きを含む声が溢れる。それを耳にした風神は、木の幹にすぎるように眠る童男を除き込み肩を竦める。

「おいおい、正気か？ たかが人間だぜ？ 助けて何の価値がある」
風神の冷徹な台詞に、咲耶姫は彼を睨み付ける。彼女の鋭い眼光に、彼は一瞬怯んだ。

「価値など関係無いわ。私は先程、この童男に木を切りつけられ、痛みには呻きました」

「はあ。だったら尚更助けたくないんじゃないか？」

風神は奇妙な生物を見つめるような目付きで咲耶姫を見、咲耶姫は悲哀を帯びた面持ちで首をゆるりと振る。

「いいえ。私を感じたように、この童男もきつと胸を痛めたに違いないわ。彼は母を亡くせば、天涯孤独になってしまふ。私に人間の願いを叶える力はないけれど、少しでもあのような痛みを感じる者を減らしたいの」

切に訴える彼女を嘲笑するように、風神はふんと荒く鼻息を吐き、声を激しく打擲させる。

「馬鹿らしい。人間に同情するのか」

「……言つてしまえば、そうかもしれないわね」

「はっ。俺は嫌だね。そもそも人間つてのは数が増えすぎたんだよ。その数を減らし均衡をとるのが、今回流行り病を蔓延させた目的なんだ。もし風邪を追ひ払えば、その均衡が崩れかねない」

風神の厳しく生真面目な声音に、咲耶姫は俯く。彼女はそれきり、何も言おうとはしなかった。

「諦めな、姫様。俺らは人間を淘汰しているだけでいいんだよ。人間なんざ結局は神の創造物でしかない。生かそうが殺そうが、創造主である神の勝手だ」

「では、助けるのもまた神の勝手ということにはならないか？」

唐突に発せられた声に、咲耶姫はつと月読命を見つめる。彼の声に遮られるように口をつぐんだ風神は、呆れと憤りに大袈裟なため息をつく。

「俺の話が聞こえなかったか？ あんな奴ら助けるに値しない。人間なんざごろごろ居るんだよ」

「しかしこの童男には家族は一人しかいない！ 頼む。某も、咲耶姫の意見を尊重したい」

月読命の言葉に、咲耶姫の瞳が涙に揺れる。

「だから何だつてんだよ。俺らにとつちや、老若男女関係なくただの人間に過ぎねえんだよ。変な感情を抱くな」

しかし風神はあくまで冷たく、月読命の言葉を受け入れようとはしなかった。

強風にさえびくともしない巖のように頑なな彼の意思に対して、咲耶姫は息を整えるように深呼吸した後、腰を折り臉を伏せる。

「お願いします。私は彼を、病に苦しむ人々を、救いたい。自己満足だと言われても構わない。もし均衡が崩れるようなことがあれば、——私が、すべての責任を負うわ」

其ノ伍

押し殺したような低い声を最後に、沈黙が覆い被さる。月読命は信じられないという風に首を左右に振り、風神は啞然と咲耶姫を見つめる。

「……姫様、正気か？」

「ええ」

「人間のために命を投げ出すに等しい行為だぜ？ 分かってんのか」
「もちろんよ」

顔を上げた咲耶姫は、風神から目を逸らすことなく真っ直ぐに彼を見上げ、力強く頷く。

「……あんたら、救いようのない馬鹿だな。もういい、俺が折れるよ、降参だ降参」

風神は軽く手を振り、髪を軽く揺らすと諦めたような声を上げる。咲耶姫は桜のように美しい笑みを咲かせ、感謝の言葉とともに再び頭を下げる。

「咲耶姫、本気か？」

流石にこの展開は予期していなかったらしい月読命は、咲耶姫へ不安げな視線を向ける。彼女は月読命へ頷くと、短く肯定の言葉を述べる。

「私の行いで救われる者がいるの。何物にも代えがたいほど尊い行いだと思うわ」

後悔など微塵も感じられない咲耶姫の口調に、月読命は目を見開いた後、苦笑を浮かべ頷く。

「そうか。咲耶姫がそう思うのであれば、己の信ずることを成すといい」

二人の様子を見下ろす風神は溜め息を零し、幹に背を預け枝の上に座る。居住まいを直し、彼は息を荒々しく吐く。

「いいか、一回だけだぞ。これきり、お前らにはかかずり合わない

からな」

風神の言葉に、咲耶姫は短く首肯する。風神は嘲笑か自嘲か、小さく口の端を曲げ息をつく。

「本当に、どうなっても知らないからな」

囁くような声を残し、風神は風を巻き上げる。風は桜の花弁を闇夜に舞い散らせ、人々の願いの結晶とも呼べる鈴を鳴らす。二人が見守る中、風神は闇へ溶けるように消え去った。

其ノ陸

* * *

海を緩やかに漂う海月のような月を見上げる。桜の木の枝に横たわる木花咲耶姫は、悩ましげな溜め息をそつとついた。

「溜め息など、君には似合わぬよ」

唐突に地面の方から声が上がる。咲耶姫は瞠若し、枝越しに地を見下ろす。

「月読命……」

「数日ぶりだな、咲耶姫」

地上を照らし出す月光を彷彿とさせる彼の穏やかな笑みに、咲耶姫はふつと口許を緩める。

「ええ。あの童男の村の病も治まり、彼の母親も無事なようよ。蝶がそう告げてくれたわ」

「薄桜の胡蝶か。であれば安心だな」

月読命は確かめる風に頷く。咲耶姫も小さく顎を動かし、けれど、と言葉を続けた。

「いつまで経つても、私に罰が下らないのよ。神の力を奪われ、暫く地上へ降りてこれられないようにされてしまうだろうと覚悟していたのに。嬉しいことではあるけれど、逆に不安になるわ」

咲耶姫の訝しげな眼差しに、月読命は僅かに顔を歪める。

「咲耶姫、気付いているか？」

「はい？」

「風だ」

「風……」

月読命の言葉に、彼女ははつと口をつぐむ。風が、そよりとも吹いていないのだ。桜の花弁も鈴も音をたてず、恐ろしいほどに凧いでいる。

「ここ数日、ずっとこうだよ。気付いていなかったか？」

「ええ……。それでは、まさか」

「ああ。風神は、自らがすべての罪を被ったのだろう」

「そんな……！ だって……」

咲耶姫は理解し難いといった風に頭を振り、眉間に縦皺を刻む。

「だって、彼はあんなに嫌がっていたのに。それなのに……」

「根はいい奴なんだよ、風神は」

蜜色をした満月の光を彷彿させる柔らかい声が、咲耶姫にそっと語りかけられる。彼女は物憂げに瞳を陰らせ、緩慢な動きで首を左右に振る。

「悪いことを、してしまっただわ」

吐息に近い咲耶姫の密やかな呟きに、月読命は労るような笑みを浮かべる。

「これも彼の判断だ。君が憂う必要はない」

「けれど……」

「己の行為を反省し悔いるのではなく、風神の行いと思いやりに感謝をするべきだよ」

幼い我が子を諭すような、優しい月読命の声。俯き、苦悶していた咲耶姫ははっと彼の瞳を見る。月光を浴びて風ぐ水面のような銀の瞳が、静かに光を弾きながらこちらを見返していた。

咲耶姫は微かに頷くと、静かに息を吸う。芳しい香りを胸に満たし、彼女は咲き誇る大輪の桜のように美しい微笑みを浮かべた。

「ありがとう、風神」

咲耶姫の囁きに、何処からともなく微風が吹いたような気がした。

後書き

G R E Eにて友達の代月檻樓さんより「月、鈴、風で和風小説を書いてほしい」とのリクエストをいただき、書いた短編作品です。
やっぱり和風の小説って良いですね！
↑

この作品は私のホームページでも公開しており、月読命と木花咲耶姫に限らず、様々な日本神話を元にした小説を「現世の神々」というタイトルで連載形式に投稿しています。そちらにも足をお運びくださると幸いです。リンクは私のユーザ情報のページに貼っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671v/>

神々の宵

2011年9月29日03時23分発行